

SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス'85秋

◆創刊100号記念◆

- 座談会：トパスとしての大学セミナー・ハウス
現代学生からみたその魅力と可能性
- 主題に見る20年 教育プログラム開催状況
- グラフに見る20年の歩み 利用者とともに創ったセミナー活動の拠点
- 『セミナー』考 連載「わたしたちの合宿」を手がかりにして



Plain living and high thinking

No.100

トポスとしての大学セミナー・ハウス

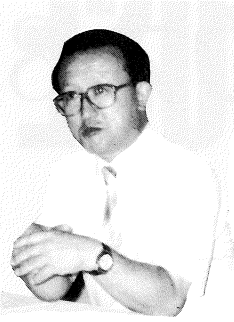
現代学生から見たその魅力と可能性

'85年8月29日 於・私学会館

●出席者●

- 山岸 健 (慶応義塾大学教授・社会学) <司会>
- 前田 愛 (立教大学教授・近代日本文学)
- 小田 晋 (筑波大学教授・精神医学)
- 松本 高志 (東京大学博士課程・宗教学)
- 河野左千子 (東京外国語大学4年・イタリア語)
- 今井 千恵 (早稲田大学3年・社会学)
- 藤森 弘 (慶応義塾大学3年・政治学)

山岸 このたび「セミナー・ハウス」が創刊一〇〇号を迎えることになったのを記念して、今日は日頃からいろいろな形で大学セミナー・ハウスに関わりを持っていらっしゃるみなさんにお集りいただき、自由な意見を伺いたいと思います。大学セミナー・ハウスは今年7月で開館20周年を迎えましたが、今や日本のいわゆるセミナー・ハウス活動の確固不動としたシンボリックな存在になり、今後の発展が大きく期待されています。



山岸氏

はじめに学生のみなさんと大学セミナー・ハウスとの出会いについて伺ってみたいと思います。

松本 昭和54年の大学共同セミナー「仏教と人生」で、宗教学のセクションに参加したのが最初です。当時、宗教学を単に建前として客観的に研究するだけではなく、何か自分の肌と直接触れるも

のが欲しいという強い欲求を持っていましたが、やはり大学の講義やゼミナールではそれを満たしてくれませんでした。学生と教官が泊り込んで、とことん納得いくまで話し合えたら、学問的な知識だけではなく、「先生にとつて学問とは何なのか」という質問ができるだろうと思ったことが参加の動機でした。

参加してみると、もう最初の晩から話はそういう方向で動いていたみたいで、ほとんどみな寝ずという感じで話をし、非常に充実していたことを覚えています。

河野 私の場合は、今年の5月に行われた「日本文化の深層」という大学共同セミナーがはじめてだったのですけれども、その中の「性と妖怪」というセクションが、卒論の題材として扱おうとしている「魔女」と何かしら関係があるのではないかと、題名を見た時に直観的に思ったんです。セミナーは日本文化についてだったんですけど、何かしら自分の視野が広がるのではないかと思ひ参加しました。

今井 私が参加したのは、今年の3月の「管理社会のライフ・スタイルを考え

る」という大学共同セミナーなんですが、2年生でゼミを経験したことがなくて、ゼミってどんな雰囲気だろうか早く知りたい、というのが第一の動機でした。それから、私はサークルに加入していませんけど、サークルでは自分一人で行動することが少ないんですね。どこかに自分の居場所を決めてしまわないと「ボヘミアン」になってしまうのではないかと不安になって、サークルに入ったんですけど、実際はとても束縛されることが多く、みんなで集団行動をしているような感じがします。そういう意味で、大学生活の中で自分自身に不満があつて、3年生になるに当って、何かインパクトが欲しかったのです。

応募してみてびっくりしたのは大学数が非常に多く、参加者の共通項を探そうとしても見つからなかったことです。あえて共通項を探し出そうとするなら、自分の関心のある学問分野、問題意識、悩みなんです。

藤森 最初に参加したのは、最近の共同セミナーで一番盛況だったという「こ

とばと身ぶりの記号学」で、前田先生のセクションでした。その当時は、方位感

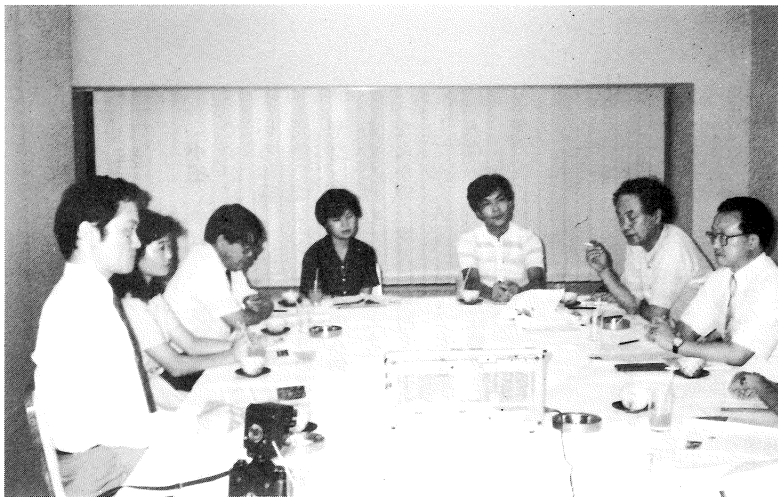
というか、どの方向に行ったらいいのかわ失ってしまった時期で、ヴィジョンが全然なかった。壁の前に立たされて、向こうが全然見えなかった時だったんです。で、その壁を何とかして打ち破って、向こう側に行ってみたく。その時にちょうど大学共同セミナーのポスターを見まして、何か刺激を受けられたらいいなあと思ひ参加しました。

その後、「管理社会のライフ・スタイルを考え」と「日本文化の深層」の二つのセミナーに続けて参加しましたが、自分と同じような問題関心を持っている人がたくさん集まり、自分では気がつかなかったところを、相手の人が発見してくれたり、また僕の言ったことが、何かしら相手にインパクトを与えられたか、そういう相互性の中で、議論が白熱してゆく雰囲気がありました。

自然の中の知的空間

山岸 皆さんは、最初あのハウスの景観、あるいは建物をどんな感じで見ましたか。

松本 まだ今と違ってかなり良かったものですから(笑)、求道というか、何か求めているという気がすごくあつたんです。そういう中で、セミナー室での演習に参加して、宿舍であるユニット・ハウスへ帰って眠る。その往復という生活の仕方自体がとても満足だった気がします。



河野 はつきり言って、本当に驚きました。私はホテルみたいな所を想像して



河野さん

いたものだから、何ていうところに来ってしまったのだらうと……(笑)。楔形の本館にも驚きましたが、泊まるところがユニット・ハウスで、ベッドが二つと机が置いてあつて……。これでは、まるでキャンピングじゃないかと思つたんです(笑)。

山岸 多摩丘陵の一角にあるセミナー・ハウスの施設は、自然の中に深く根を下ろすかたちで設計されていますが、楔形の本館や交友館の中に入ると、何か船に乗っているような感じを持たなくもない。現名誉館長の飯田宗一郎先生は、よく大学セミナー・ハウスは「Friendship」と「scholarship」という二つのshipが船出をする場であると言われましたが、ここでは、ただある風景を見るということではなくて、さまざまな時間や空間を自分なりに極めて主体的に、あるいは共同的に体験することが、貴重なことではないかと思われのですが……。

前田 そうですね。僕が最初に大学共同セミナーに関わつたのは昭和45年の

「再検討・近代の日本文学」ですが、あの頃はカブト虫が何か飛んでいるようなそんな時期だったんです。もう一五―一六年たちますと、周りにだんだん団地が立ち並んで、セミナー・ハウス一帯の丘陵が何か団地の海の中の島みたいになつてきて……。広がる団地の海と大学セミナー・ハウスの緑の島、そこが僕はちよつと心配なところなんですけどね。

ところで、セミナー・ハウスには意外にまだ十分利用されていない所があると思うのです。たとえば、ピラミッド型の中央セミナー館ですが、なぜか僕はあそこへ行くことと眠くなつてしまうんです(笑)。何か胎内に籠つたような不思議な空間になつていて、他の場所とは違った雰囲気がある。また、入口のところにも多摩の農家をそのまま移築した遠来荘がありますね。去年、立教の文学部でやっている「集中合同講義」ではじめてここを使つたんですけれど、まず掃除をすることからはじめて、蚊取り線香を用意します。まさに寺子屋のように昔の農家で勉強するのも、今の学生にとっては、一つの新しい体験だったのではないのでしょうか。ですから、大学セミナー・ハウスは場所トポスとして非常に魅力があるのですが、そこに参加する人たちが必ずしも十分にその可能性を掘り起こしていないんじゃないか、という気がしています。

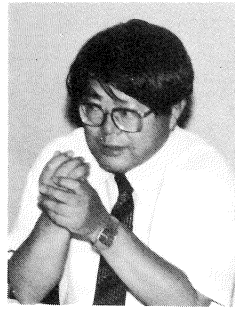
小田 僕は、大学共同セミナーを二回、大学院共同セミナーを一回担当させていただいているんですけど、一回やること

に違った体験があるんです。あれ、こんな所にこんなものがあつたのかと。あれに似たような体験を僕はもう一つ知っています。ネパールのカトマンズにある目玉寺です。前田先生もすでにご指摘になつているんですけど(注・本紙第92号に掲載の「大学セミナー・ハウスの記号論」)、共同セミナーの場合、最初に学生諸君も教師もキャンパスの上のほうに集まつて、それから下のほうへ降りて行く。それこそ人間の精神の深層へ下降していつて、そこで寝て、それからまた知的空間に上昇してくる。僕はそれが知的境界を作つていると思うんです。

先ほどホテルのようなものを想像して行つたら仰天したとおっしゃつたでしょ。実際、ホテルのような研修所を不便なところに建てるのが、最近流行っているんですね。企業とか政党の研修所などはみんなそうですよ。ただ、そういう所で研修をやるのと、大学セミナー・ハウスで二泊三日のセミナーをやるのとでは、どちらがストレスかという点、実は前者のほうがなのです。大学セミナー・ハウスもはじめて行つた時は相当緊張しましたが(笑)。大学セミナー・ハウスの知的活動の雰囲気は、あの建物の空間を移動してゆくことによつて、自然にプログラムされている。ホテルのようなどころに缶詰めにされて、無理矢理考えろと言われている時は、確かに効率的だけれども、何かブロイラーが無理矢理卵を生めと言われているような感じで……。

監獄VSパフォーマンス

小田 僕は今、「筑波空間」にいるんですが、知的空間と称されるものをいろいろ体験してみると、結局は空間だけの問題ではなくて、手作りの運営の仕方や思想、飯田名誉館長の人柄とかが関係するのだけれども、たとえばコラムニストなんかで一度大学共同セミナーに講師として来た人で、後でこれを取り上げない人はいないですね。江藤淳さん、永井道



小田氏

雄さん、粕谷一希さん、など。大学セミナー・ハウスの場合は、施設の管理面で大変だろうと思うし、一見無駄な空間があつたりするんですけど、実際は、その中で全員がセミナーをやるという「パフォーマンス」として考えると、これは実に新しいのですね。

前田 ミシェル・フーコーが『監獄の誕生』で、病院や学校は監獄の設計思想と同じであり、一方的に見るものと見られるものとに分類された管理と支配の空間構造を持つていと書いていますが、大学セミナー・ハウスの面白い空間に行きますと、われわれがふだん教えたり勉強したりしている大学のあり方が、やは

り何かおかしいんじゃないか、と思いませんね。今、小田さんがおっしゃったように、確かに知的空間は、リタングンシーと言うか冗長度、無駄を含んでいるのが当たり前なんですけど、そういう発想がどうもまだ大学のキャンパスに浸透していかない。郊外に移った大学もずいぶんありますけど、ホテルが一つのモデルになつていのは、おかしいなと思います。

藤森 僕は信州出身なので、自然の中へ逃げて行きたいという欲求があつたんですが、都会から山の上まで行くと行つたらおかしいですけども、大学セミナー・ハウスには、ある種、別世界に行けるようなところがあるんじゃないでしょうか。だから、オーバーに言えば、皮膚感覚が違う。あれはとても不思議な快感です。

小田 山は昔から出会いの場であり、知的パフォーマンスのための場所だったんですよ。

前田 そうですね。ですから、比叡山にしても高野山にしても情報が生産され、交換される場所になつてきた。山は、ふつう都市と対極にあると考えられているけれども、逆に都市の原型的なところを持つてい。そういう思想が、伝統的に日本の歴史の中にあつたんですけれども、ある時から忘れられてしまった。特に、それが教育の場実際に活かされるのが非常に少なかった。

生命が語りはじめ

松本 今、出会いということがでましたけど、大学で密度の濃い出会いを経験しているかどうかと言うと、やはりそれがないから来るんだと思います。たとえば、大学の講義やゼミでは、一つの方法が設定されていて、ある見通しを持ちながら最終的な目標に向けて着々と一定のペースで進んでゆくことになりました。ところが、大学セミナー・ハウスでは専攻領域のまったく違う人たちが飛び出してくるかわからない。暗中模索のこ



松本氏

とをやるわけです。そういう時には、セミナー全体が激しく揺れ動く。ある人の出した話題を中心にして、グループが一斉に方向を変える。そして、生命が語りはじめて、新しいものが生まれてくる。そういう生命の底流の何か見通しのつかない予想外のもののダイナミックな出会い。それが、今の大学にはない、かえりたい体験だという気がします。

小田 こっちが準備していつて、ある程度自信を持って臨んだ時ほど、それが起きる(笑)。グループ・ダイナミックスというのはふつう一週間近くやらないと

動き出してこないのだけれども、ここでは二泊三日で動き出してくるでしょ。これは、なぜなのかと思うんですが、一つには夜の時間がありますね。夜は周りに闇があるということなんです。周りに闇のない夜は、延長された昼にすぎないけれど、あそこには少し前の知的な仕事に携わっている人たちが感じていた「闇の時間」がある。それから、大学共同セミナーをワークショップとして設定しているでしょ。ゼミナールと言っても、実際はワークショップなんです。

藤森 都会全体を一つのカプセルと見たとすると、そこから「自然の中に放り出された」という感じで、自己確認ができるんですけど、その意味でも、大学共同セミナーに参加すると、見知らぬ他者に出会えると同時に隠された自己を発見できる。僕にとって、大学共同セミナーの一番の魅力は何と言っても新鮮な驚きを与えられたことでした。ふだんの生活では、不意を襲われたり、偶然と出くわすことがあまりなく、予想されたルートですべて見通しがつてしまう。そうすると生活の中から、だんだんと喜怒哀楽が消えてゆき、いろいろな気晴らしはするけれど、本当の感動はなかなか生まれてこない。

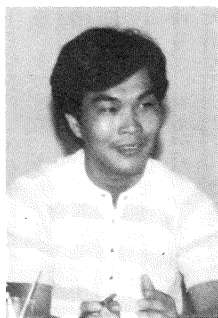
今井 確かに、新鮮な驚きというのは、今は意識して得ようとしないと得られないものですね。その点、大学共同セミナーの場合は、参加者が自分の主体的選択と興味によって、いろんな大学から集まっ

てくるので、藤森さんの言う新鮮な驚きはかなり得られるんじゃないかと思うんです。

河野 何か目的を持って行った旅先での出会いのような……。

今井 それだけ両者のヴォルテージが上っている。

藤森 大学セミナー・ハウスでの出会いは、そういう意味で日常的な常識の通用しないところで起こるわけです。各人の経験は全部違うし、今までの自分を相対化して、まったく見ず知らずの人にも通用するようなことばで、自分を語らなくてはいけないところにまで、追い込まれる。ふだんの生活では先入観や固定観念があって、生身の人間としての相互関係



藤森氏

をなかなか結ばませんが、今まで全然知らなかった人との出会いを通して無意識が掘り起こされる……。

前田 ですから、言い換えれば、そういう無意識をどう掘り起こしてゆくかということですね。僕の書いたものでも、大学セミナー・ハウスでヒントを得て、それを後でだんだんふくらませていったのが、結構あるんですよ。文献ならば、何々を参照したと書けますが、セミ

ナー・ハウスでアイデアを得たとは書けないので……。(笑)。

小田 昨今は、ネアカ・ネクラ論が流行っていて面白いことがいいことだとされていますが、実は知的作業をするためには、自分の心の中の深層に入っていく必要があります。一人で入ってゆくと、それこそ浮かび上がってこれないけれども、みんなで一緒に心の底に入っていく道具立てが、大学セミナー・ハウスにはある。

変わらない手作りの教育

小田 大学セミナー・ハウスの二〇年間の歴史を振り返ってみると、変わった部分と変わらない部分が見えてきます。私が一番最初に大学セミナー・ハウスにお邪魔したのは昭和46年の「人間解放

——サイバソロジーカルアプローチ——」の時でしたが、その時は大学紛争の最中で、大学はストライキを続けていて、講義など満足にできない状態になっていた。ゼミナールなんか、学内はもちろんのこと、近くの喫茶店で開いても、場合によっては問題になった。その中で正常に学問について話し合う雰囲気、大学セミナー・ハウスでは維持されていたんです。しかし当時は大激論でした。最後の総括討論の時などは、まるで大衆団交みたいで、ずいぶん白熱した雰囲気でしたね。

その後、何回かセミナーに出ています

主題に見る20年 教育プログラム開催状況

◎大学共同セミナー開催状況

- ▼昭和40年度
 - 1 世界の中の日本 (71名・17校)
 - 2 現代思潮と日本 (80名・14校)
 - 3 科学と宗教 (90名・21校)
 - 4 「新日本のビジョン」とその批判 (62名・18校)
- ▼昭和41年度
 - 5 英国のキリスト教文学 (48名・14校)
 - 6 大学の理念と現実 (95名・22校)
 - 7 実存思想と現代(1) 現代に生きるために (132名・33校)
 - 8 実存思想と現代(2) 現代に生きるために (127名・29校)
- ▼昭和42年度
 - 9 大学と人間 (88名・16校)
 - 10 世界的にみたヨーロッパと日本 (102名・27校)
 - 11 日本の思想 (59名・16校)
 - 12 文学を考える (65名・21校)
 - 13 現代とキリスト教思想 出会いと決断 (1) (108名・29校)
 - 14 現代とキリスト教思想 出会いと決断 (2) (54名・21校)
 - 15 大学と社会 講演に視野を開く (84名・25校)
- ▼昭和43年度
 - 16 音楽と社会—M・ウェーバー「音楽社会学」をテキストとして— (99名・21校)
 - 17 学問と人生—大学と現代人の課題にふれて— (66名・25校)
 - 18 平和と人権 (79名・24校)
 - 19 ヨーロッパとは何か(1) (90名・24校)
 - 20 コンピュータ時代の人間—職業の変化と人間観の変化—
- ▼昭和44年度
 - 21 大学と社会—現代を考える— (128名・27校)
 - 22 大学と社会—現代を考える— (126名・34校)
 - 23 ヨーロッパとは何か(2) (28名・15校)
 - 24 大学と人間—現代を考える— (66名・25校)
 - 25 日本人とは何か(1) (164名・53校)
 - 26 日本人とは何か(2) (123名・30校)
 - 27 一九七〇年代の都市問題—ニュータウン再開発の検討— (75名・29校)
- ▼昭和45年度
 - 28 現代文明の諸問題—新しい世界観の視座を求めて— (86名・32校)
 - 29 大学と人間—未来にかける「わたし」の発見— (64名・32校)
 - 30 再検討・近代の日本文学 (115名・52校)
 - 31 学問における創造とは何か (158名・48校)
 - 32 社会と交通 思想の主体性—キルケゴール「哲学的断片への非学問的あとがき」を中心に— (92名・33校)
 - 33 進化と適応 (127名・49校)
 - 34 社会化としての発達 (76名・26校)
 - 35 専門職と国民の生活 (59名・28校)
- ▼昭和46年度
 - 36 学問と人生—大学における出会いの意味— (52名・26校)
 - 37 自己とは何か—セーレン・キルケゴールの思想を手がかりとして— (134名・43校)
 - 38 人間と環境—公害の現状と展望— (46名・26校)

すが、学問を楽しむ雰囲気がありません。文武両道の「文」のほうを味わう雰囲気を作る必要があります。そういう問題意識を大学セミナー・ハウスは、絶えず与え続けている。

頼母子講としてのサークル

前田 大学共同セミナーでは、自分の持っている知識や考え、あるいは感じていることを相手にぶつけないと、まったく疎外されてしまつてどうにもならなくなる。それは、たとえば集団で行動することが多い大学のサークル体験とは、ずいぶん違った体験だと思ふんです。

山岸 最近大学の事情が大きく変わつてきて、ずいぶんいろんなタイプの学生がいますからね。

藤森 大学共同セミナーでも、はじめのうちは自分の大学の雰囲気から抜け切れなくて、表面的にやっていると、感じは、ちょっとありましたけれど、時間がたつにつれて……。

河野 今は、苦勞せずに人間関係をうまく作るテクニックという点では、みなすごく上手なんです。

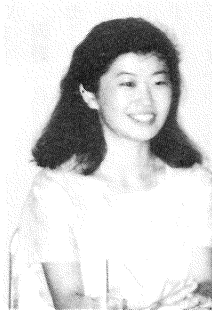
藤森 何事も自分が中心と言うと語弊がありますが、保身主義と受益主義の二つがはびこつていて、自分から何かを積極的にやってゆこうというのが、あまりないんじゃないかと思うんです。必要なのは単位を取ることで、そのためにはコピーとよき友だちがいればいいんですね

(笑)。

今井 私の入っているサークルには「需要・供給グラフ」というのがあつて、供給ノートが一つあつたら、需要の欄にいくつでも書けるという……。サークルで遊んでいても、ちゃんと卒業できるシステムになつていて。クラブの勧誘の時には、そういうノートが完備していますから大丈夫ですよ……。(笑)。

前田 その需要・供給というのは何ですか。

今井 一種の互助会なんです。需要と供給の欄があつて、供給のところは自分の完璧なノートを用意していたら、後は



今井さん

もう全部……。

小田 ああそうか、「頼母子講」ができてる。

前田 ですから、クラブに入っている学生は単位を落としませんね(笑)。

山岸 教師のほうもしっかりしなければいけないんです。学生の姿は、一面で先生の姿を反映しているんです。今、大学の先生方の姿勢も問われていると思うんです。

藤森 たとえば、講義の時などテキストを持ってきて、学生に届こうと届くま

93 文学における死——日本人の死生観にふれて (113名・27校)
94 自然科学とキリスト教——西欧における二つの普通と特殊 (100名・27校)

95 理性と想像力——現代哲学の基本課題 (87名・30校)
96 現代の社会主義 (103名・36校)
97 人間はどこまで機械か(その二) (94名・29校)
物質・生命・精神 (74名・21校)

▼昭和53年度
98 日常生活……そのルーツと展望——社会・文化・パソナリティー (106名・27校)

99 芸術のたのしみ(第3回)——美術・音楽におけるヨーロッパ・ルネッサンス—— (104名・35校)
21世紀に向かって——学問と人間の問題—— (120名・39校)
101 映画表現と人間——チャップリンと20世紀文明—— (77名・32校)

▼昭和54年度
102 学問の移植と創造——近代日本の場合—— (26名・17校)
103 空間と人間生活——自然・人間の適正規模—— (64名・24校)
104 ルソーと共に現代を問う——人間は自由なものとして生まれた—— (46名・20校)

105 日本人と(父)——新しい人間の絆を求めて—— (67名・25校)
106 一九八〇年代の世界経済 (72名・25校)

107 仏教と人生——仏教における真・善・美の探求—— (56名・26校)
108 イスラムの世界——その文明の現代的意義—— (104名・29校)

▼昭和55年度
109 エネルギーシステムと現代社会 (81名・26校)
110 芸術のたのしみ(第4回) 劇的なもの求めて——演劇と映画のドラマ、その歴史・鑑賞・実際—— (75名・34校)

111 転機に役立つ平和と人権 (75名・34校)

112 生きるサルトル (111名・27校)
113 個性と創造性——日本の未来のために—— (29名・17校)
114 ▼昭和56年度 無意識からの人間理解——ユング心理学を中心に—— (104名・30校)
115 現代人と「沈黙」 (103名・36校)
116 生活とカタチ (55名・17校)
117 都市と文学 (53名・23校)
118 コンピューターと人間 (64名・26校)

▼昭和57年度
119 ヨーロッパ中世と現代——歴史家とともに—— (46名・19校)
120 地球の過去・現在・未来——太陽と環境と生命—— (28名・17校)

121 人間の攻撃性を考える——ヒトの性は善か悪か—— (39名・22校)
122 現代に生きるC・G・ユング (108名・32校)

▼昭和58年度
123 平和・婦人・学問——現代人へのメッセージ—— (70名・24校)
124 芸術のたのしみ(第5回)——パロック概念の再検討—— (36名・18校)
125 第三世界の文化状況——人間の解放とアイデンティティの模索—— (78名・25校)

126 人間性の回復を求めて——現代における救いの問題—— (45名・25校)
127 現代指導者論——その人格と時代精神—— (42名・18校)

▼昭和59年度
128 ことばと身ぶりの記号学 (140名・40校)
129 男と女——性差の本質とその文化的意味—— (52名・27校)
130 科学ジャーナリズムの現実を問う (41名・17校)

131 管理社会のライフ・スタイルを考える (89名・37校)

▼昭和60年度
132 日本文化の深層——歴史学と民俗学の接点から—— (61名・24校)
133 情報化と社会

利用者とともに創った セミナー活動の拠点

開館以来の宿泊者数は

延べ八六万人に

新しい大学教育のビジョンを掲げて昭和40年7月5日に開館した大学セミナー・ハウスは、その最初の宿泊者を第1回大学共同セミナーで迎えた。以来、二〇年間に国内外の大小さまざまな合宿研修セミナーがこの丘で開催されてきた。グループ数で一万余、六七二回、宿泊利用者は延べ八六万五八八人に達している(図1・2。注・左掲の図表中の数字は60年3月末の集計による)。

年間利用者 三万人台から五万人台へ

開館以来の宿泊延人数を年度別に並列してみると(図3)、「教授と学生の交り

の家」での二〇年の活動の軌跡を見ることができる。

大学紛争を経て、宿泊をともなうセミナー活動の意義が見直され、この間「合宿研修」は年々盛んになっていった。年間利用者数から、この二〇年を仮に三期に分けてみると、開館当初の第Ⅰ期は年間三万人台、第Ⅱ期は四万人台、そして第Ⅲ期は五万人台と、着実に上昇を続けた。

これは宿舍・セミナー室等の拡充の推移にもほぼ比例しており、第Ⅰ期(宿舍定員二〇七人)はユニット・ハウスとゲスト・ルームだけでスタートしたが、第Ⅱ期(二四一人)には長期セミナー館が、第Ⅲ期(二七〇人)には国際セミナー館が加えられ、国際集会を

じめ多様な研修の要求に応えられるようになった。なお、宿舍の稼働率(収容定員と宿泊延人数との対比)でも、この二〇年の前半の一〇年間は四〇%台、後半は五〇%台が記録されている。

「大学共同体」の拡大

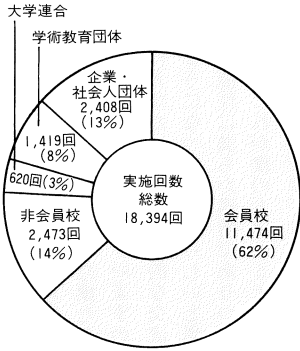
会員校は25校から62校へ

利用グループの構成をみると、「会員校」「大学連合」は増大し、「学術教育団体」は減少の傾向(学会等が都心型で簡便な施設を求めようになったためであろう)を示している。しかし、二〇年来利用率が年々上昇した最大の要因が「会

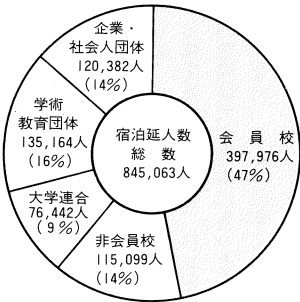
員校」の増大にあることは図3で顕著である。昭和37年一三校を発起人として財団法人を設立し、40年二五校をもって開館した当ハウスが、大学共同体として着実に発展し続けたことを示す軌跡でもある。協力会員校は現在準協力会員校を含め計六二校である。

なお、「会員校」「非会員校」「大学連合」の利用者は、近年七〇%を越え、これに「学術教育団体」の教師・学生を加えると大学関係者の利用は八〇%に達する。開かれた共同体としての利用態様を示すものと言えるだろう。

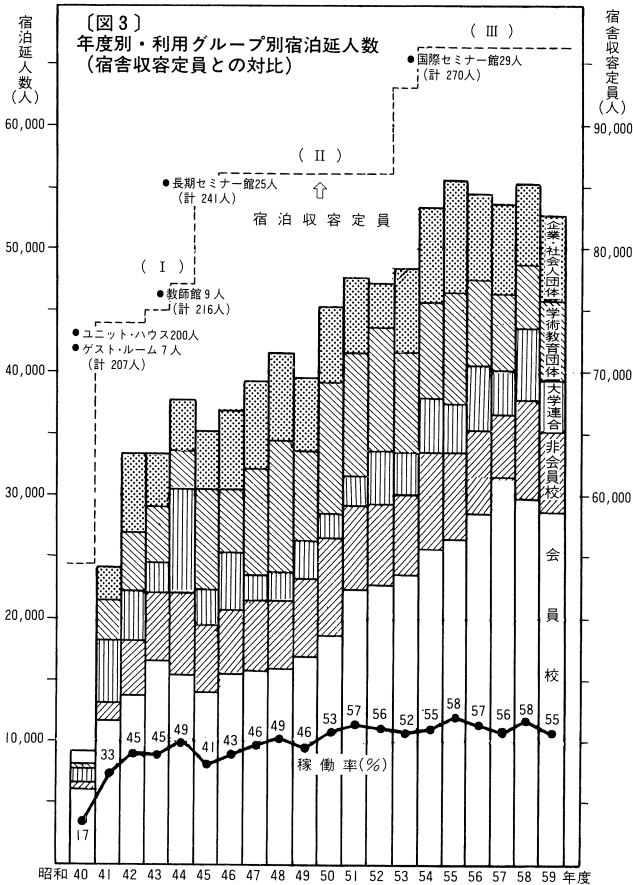
〔図1〕利用グループ別実施回数



〔図2〕利用グループ別宿泊延人数



〔図3〕年度別・利用グループ別宿泊延人数 (宿舍収容定員との対比)



過去七年間、三三回にわたって本誌に連載されてきた「わたしたちの合宿」は、この丘で教師と学生がともに作り上げてきた学習の場を紹介した貴重な記録である。創刊100号を迎えたこの機会に、これらの実体験の中から、「セミナー」とは何か」を考える手がかりを探ってみた。

◇セミナーの目的の多様性

一口にセミナーと言っても、各大学のねらい、構成、展開は、まさに百花繚乱である。それを、あえて主目的別に分類すると、次の六つが挙げられよう。

《儀礼としてのセミナー》 新入生のオリエンテーションとして、年間行事の中に組み込まれたもの。したがって学生数の増加に応じて日数は限定され、学生との触れ合いの不足をなげく声もある。しかし、日本女子大社会福祉学科の十七年、お茶の水女子大の一九年という長い伝統をもつものもある。

《学内演習の仕上げとして》 年間にわたる講義・演習の締めくくりとして、年末や学年末に集中して実施されるもの。すでに長い積み重ねを下地としているため、一泊、二泊でも効率的に運営されている。上智大の国際法演習、杉野女子大の教育原理ゼミ、鶴見大英文科ゼミなどの例がある。

《強化合宿訓練として》 主として行住坐臥の中に浸透した外国語の訓練をめざすもの。したがって三、四泊または一週間の長期にわたるものが多い。この種の

ものは、二日目の午後からが山であり、それを乗り切るためにいろいろ工夫が必要なようである。

《多様な要素の組合せによる学習の場として》 通常の学内授業では不可能な場面設定による学習効果をめざすもの。たとえば、卒業生と在学生の自由討議、留学生を含む比較文化研究、多学部合同の学際的集中講義、さらには四大学にまたがる社会学合同ゼミなどの例は、いずれも、外の世界の風を取り込むための工夫である。

《教育課程の補完として》 正規のカリキュラムでは手の及ばない分野をカバーするもの。たとえば、キャンパスの分かれた教養課程の学生に対する専門教育のオリエンテーション、夜間部の学生の集中指導、学内自主研究ゼミの総括、三、四年生の合宿における卒研指導と下級生の事前指導、学内における日本人・外国人学生の遊離傾向の解消など、さまざまな努力のあとが見られる。

《新しい人間関係の創設の場として》 日常的な学習グループではなく、新しい出会いによって自己発見と社会的適応を助長しようとするもの。都立大のエンカウンター・グループ、理科大の人間関係ワークショップなどの例がある。いずれも専門的なオナイザーの援助が必要であり、三、四泊でもなお不十分だと言われている。

◇セミナーの内在的特性

これまで、セミナーが多様な目的をもって幅広くひろがっていることを見てきたが、それにもかかわらず、セミナーという独特の形態をとる限り、それらに共通する内在的な特性のあることが見られる。

《構成者の対等性》 セミナーの場面では、大学の日常的な階層がある程度崩れて、年長者と若者、教師と学生、学外者と学内者、異性の友人などが、新しい舞台の上で対等にお互いを発見する可能性が生まれる。同じことを学内でやっても成功しにくいようなことが、自然に達成される。多くの人が、セミナー体験によって、本音が開けた、新しい側面を発見したと言っているのは、そのためである。

《自由度の拡大と自発性》 日常なじんだ生活から離れると、どれほど綿密に計画しても、一步一歩が意識的な判断を要求する。すべての人が、自分が何をすればよいかに緊張し、自由度が大きいことを知るほど、自分の責任感を自覚する。セミナーで、学生がこんなに自発的にやれるとは思わなかったという声をよく耳にするが、このことは、日常の大学生活の中で、学生たちがいかに受動的にしか行動できない状態にあるかを、暗示しているようである。

《演出効果と指導者の役割》 セミナーは、対等な人間の自発的な活動として展開される側面と同時に、すぐれた指導者の

の企画による設定の有無によって、集団活動の成果が大きく左右される面をもっている。

すぐれた演出は、ドラマティックな効果さえ生み出し、情動的な感銘によって仲間意識と行動意欲が刺激される。

《隔離性と二過性》 日ごろなじんだ刺激から隔離されて、知的探究に集中する雰囲気。Plain Living ということも、そのための一つの手段である。その面でセミナー・ハウスの環境の変化や学生の気風から俗化の進行をなげく声も一部にある。

しかし、このような隔離は、当然一時的なものであり、セミナーの体験は一過性のものであることを免れない。その限定された時間の枠の中で、自分の未知の可能性を発見して、それを目標に努力するスタートを切ることができるかどうか、それが、セミナー体験を生かせるかどうかの別れ目になるように思われる。

◇おわりに

「わたしたちの合宿」に綴られたセミナー体験に徹底しているものは、大学セミナー・ハウスという場所（トボス）の場所性であると言ってもよいかもしれない。これまでの大学行政がとかく見落してきたものが、ハウスのトボスの中で見えてくるように思われる。本号に特集した座談会を本『セミナー』考に併せてお読みいただければと思う。

大学セミナー・ハウスの略年譜

- 〔昭和34年〕
11・25 セミナー・ハウスの構想を話合う初会合（提唱者・飯田宗一郎。上代たの、大浜信泉、茅誠司など九名が参加）。
- 〔昭和36年〕
7・21 三井銀行会長佐藤喜一郎に建設後援会会長就任を懇請、共鳴をえる。
- 8・18 財界有志による建設懇談会開催。
- 11・1 三井銀行本町支店ビル内に設立準備事務所を開設。
- 〔昭和37年〕
1・20 建設敷地を南多摩郡柚木村に決定。
- 3・31 財団法人大学セミナー・ハウス設立が許可。
- 9・1 『大学と人間——人間形成の新しい方向を求めて——』を発行、設立の理念をうたう。
- 9・19 建設後援会創立総会を東大懐徳館で開催。

- 11・1 設立発起人校（国公私立13校）を母体に協力会員校制度発足。
- 12・21 設計を早大教授吉阪隆正（U研究室）に依頼が決定。
- 〔昭和38年〕
1・21 財団法人創立記念講演会を朝日講堂で開催。
- 5・15 「大学と人間」叢書をみすず書房より創刊。
- 6・29 会員校大学教員懇談会、大学教育セミナー」第一回を箱根で開催。
- 〔昭和40年〕
1・25 ニュース「セミナー・ハウス」創刊。
- 7・5 開館式、第一回大学共同セミナーを開催。
- 11・1 建築落成式。
- 〔昭和41年〕
6・1 「大学セミナー・シリーズ」をみすず書房より創刊。
- 〔昭和42年〕
7・10 講堂・図書館落成式、千人会発足。
- 〔昭和43年〕
12・7 教誨館（松下館）落成式。
- 〔昭和45年〕
4・1 事業費に国庫補助金交付が決定。

- 5・10 長期セミナー館落成式。
- 9・19 第一回大学教員懇談会「日本における大学改革の反省と展望」開催。
- 10・22 開館5周年記念式、大学セミナー・ハウス讃歌を発表、記念論集「西洋と日本」現代科学と人間（共に中公新書）を刊行。
- 〔昭和47年〕
3・29 第一回国際学生セミナー開催。
- 4・1 運営費に国庫補助金交付が決定。
- 11・18 創立10周年・開館7周年記念式挙行、記念論集「日本人の再発見（弘文堂）刊行。
- 〔昭和48年〕
12・1 野外ステージ竣工祝い。
- 〔昭和49年〕
12・25 「大学を開く——創立十年・開館七年史——」刊行。
- 〔昭和50年〕
6・27 大学院セミナー館落成・遠来荘（多摩民家）移築完成を祝う会。
- 7・27 千人会員、千人を突破。
- 11・15 開館10周年記念論集「東洋文化と日本（へりかん社）刊行。
- 〔昭和52年〕
4・1 本法人、試験研究法人の指定を受け

- 〔昭和53年〕
5・27 交友館落成式。
- 6・24 国際セミナー館落成式。
- 10・1 「大学共同セミナー100回の歩み」刊行。
- 10・8 大学共同セミナー第100回記念の集い。
- 10・20 開館以来の宿泊延人数五〇万人達成。
- 〔昭和54年〕
6・23 第一回大学院共同セミナー「諸学の系譜と真実愛——方法論の再検討——」開催。
- 〔昭和55年〕
6・2 開館15周年記念講演会「エネルギー・その過去と未来」を朝日講堂で開催。
- 6・9 飯田宗一郎、名誉館長に推される。
- 〔昭和56年〕
4・1 短大・工専を対象とした準協力会員校制度発足。
- 〔昭和60年〕
10・25 ニュース「セミナー・ハウス」創刊100号。

- 〔昭和57年〕
10・25 ニュース「セミナー・ハウス」創刊100号。

千人会

85年8〜9月

◇現在会員一、五五九名（実会員数）です。
（通算入会者一、七五四名）

- ◇新しく会員となられた方々
（第80回報告（申込順））
- C 早稲田大学大学院生 八木 尚志殿
 - C 株式会社シーイ主任 滝口 亨殿
 - C 東京経済大学教授 末岡 俊二殿
- ◇会費ありがとうございます。
- 川原啓美、平出彦仁、川合隆男、高村象平、小林宏農、有末賢、鹿島健次、原誠、佐藤蒙、山本茂、菊地雄二、原島幸太郎、稲田拓、村上光雄、芥川龍男、三和治、田中庄藏、加藤

- 栄一、花鳥重春、大吉芳彦、中山光雄、十代田知三、浅井邦二、奥田夏子、柴田誠、宮野三郎、石川淳志、小田切松義、村松暎、八木尚志、山本武彦、渡辺昭夫、大河内繁男、岡村浩、中川重雄、宮川俊彦、山本芳夫、長内了、大藏隆雄、平井久、色川大吉、井上孝、滝幸三郎、合田周平、國岡昭夫、小林忠義、米山弘、福山仙樹、千住鎮雄、伊藤一郎、岡村文子、厚東偉介、岡本剛、田中弥寿雄、松村信治郎、横田澄司、滝口亨、児玉久雄、原田行男、佐野晃、押田勇雄、石橋秀雄、出居茂、鈴木成文、市川博、進藤トク、下田弘、井手久登、冲塩莊一郎、太幡祐二、小林弘政、村田晴夫、本間正人、志賀英、片山清一、古屋野正伍、村上陽一郎、高村弘毅、島袋喜昌、林勲、黒田孝郎、末岡俊二、武澤信一、岩崎不二子、三村卓雄、千葉正士（敬称略）

◇千人会員からのたより◇

昨年海外出張で不在にしていた。今年是非セミナー・ハウスにお邪魔したいと思つてます。 埼玉大学助教授 山本茂

還暦をむかえた私にとりまして、セミナー・ニュースは慧心と若さを注入する糧であり、ますますその重みを増しております。 日大第二高等学校教諭 村上光雄

私は明年三月で東京理科大を退くこととなります。然し千人会はつづけたいと思つてます。 東京理科大学教授 岡本剛

生来弱身、還暦を迎えることなど夢にも思いませんでした。お祝いのごはありがとうございます。九月下旬参上します。

立教大学教授 武澤信一

寄付金 報告

85年8〜9月

今年三月で上智大学を定年退職、念願の太陽エネルギー利用研究のため、小さな会社を設立しました。
太陽エネルギー研究所長 押田勇雄

●一般寄付金

- 一〇、〇〇〇円 東京理科大学クライツイ
- 三〇、〇〇〇円 明星大学通信教育部夏期スクーリング受講生一同殿
- 五、〇〇〇円 早稲田大学教授 鴨 武彦殿
- 二、三〇〇円 学習院大学児玉セミ殿

業／務／通／信

85年8・9月

夏休みの合宿から

猛暑の夏だった。しかし9月もなかなになると、さすがに朝夕涼風が立ち、構内の萩が秋の訪れを告げる。お彼岸の連休で、私立大学の夏休みも終了するので、7月後半から連日続いたこの丘の活況は一段落となる。夏の休暇を利用して、熱心に研修スケジュールに取り組まれた多くの人々を想い出しながら、以下8・9月の合宿からいくつかの話題を拾ってお届けしたい。

●個別大学の合宿から

ゼミナールを中心とする各大学の合宿は、夏休み後半にあたる8月末からの約一カ月間に集中した。指導教授のお名前等は別掲「利用状況」をご覧ください。国分康孝・東京理科大学教授は三グループの「人間関係ワークショップ」で8月中旬に計一〇日間、すなわち同月の三分の一をハウスで過ごされた。一方、9月には、宇野重昭・成蹊大教授と深沢実・青学大教授がともに週に二回の合宿で来泊されている。

恒例の集會では、8月末の一橋大「外国人研究留学生社会科学基礎ゼミナール」（八ヶ国・二二名が四泊）が四年目。9

月に入って、山梨英和短大「英文学研究ゼミナール」（二〇六名）は二年ぶりの再来で、通算一二回目。法政大「技術連盟リーダーズ・キャンプ」（二二五名）は一九年目。立大「集中合同講義」（二六八名が四泊）は二三年目で、今回のテーマは「ユートピアとは何か」。そして津田塾大「学内ITC」（三七七名が六泊）は八年目である。

●師弟「再会の合宿」

今年も8月はじめの週末に、東京理科大「クライツイグ・ゼミ」の再来を迎えた。物理学科の大沢綱一郎教授と同ゼミOB9名の年に一度の「再会合宿」である。在学中の原書輪読で一〇回、引き続き卒業後も毎夏定例の再会で一〇回、恩師を囲む同一メンバーによる同合宿は、この夏で通算二〇回目になる。本号



野外でのエクササイズ
——人間関係ワークショップ（東京理科大学）

の『わたしたちの合宿』（別掲）では、この集まりの由来といま多方面で活躍する愛弟子たちなどを、大沢教授からご紹介いただいた。なお、同ゼミの師弟一〇名全員がハウス千人会の会員である。

本紙第87・88号所収『わたしたちの合宿』に「登場場顯つた東京学芸大「文章研究ゼミ」の永野賢教授が今春退官された。しかし、一四年間毎夏この丘で続けられた合宿は、今後も同名譽教授を中心に、名称を「文章文法研究会」と改めて、存続されることになった。8月末に行われた退官後初の合宿（下掲写真）には、例年同様OB諸氏も参集、恩師との再会を果たした。そのお一人、佐久間まゆみ・筑波大講師（言語学）は、「恩師の退館を記念して」と先般千人会員になられ、「今後は先生の志を継いで、私も学生をこの丘に連れてきたい」との抱負を語っておられた。また、遠路学生を連れて二泊された清水英之・静岡英和女学院短大講師は、学生時代、学習院大児玉ゼミやシェイクスピア劇研究会の合宿の常連であった。たまたま児玉久雄教授が来泊中で、こちらにも師弟が再会のハプニングを喜び合う光景が見られた。

●夏休み特有の諸集會

盛夏8月には、例年夏休み特有の全国的な研究集會を迎える。「常連」には、利用回数が通算四〇数回におよぶ文学教育研究者集団（文教研）の全国集會があり、今年も8月6日の広島原爆記念日を



15年目の夏合宿を終えて——東京学芸大学文章文法研究会（中央・永野教授、前列左から2人目、佐久間まゆみさん）

は喜んで三泊された。同日朝8時15分、例年同様広島からの参加者が教師館屋上で真理の鐘を点鐘、米国からの教師・学生を含む在泊者はこれを合図に一分間、それぞれ平和祈念の黙祷をささげた（15ページに写真）。「新顔」の一つに「サマーワークショップ85」があり、「病気をみる医療から人間をみる医療へ」をテーマに、全国六〇大学からの医学生・医師ら一三六名が「全人的な医療」をめざして熱心に語り合い、お互いの体験を交流した。「全国学生ME研究会」は、昨年までの常連「千葉大医用電子工学研究会」が全国的な大学連合集會へと発展したものである。

同じく8月には、語学研修が盛んであった。英語では英語教育協議会（EILEC）、ブリティッシュ・カウンシル、東京都高等学校英語研究会など、フラン

ス語では大学生伝語ITC、イタリア語は日伊協会などの集会である。

●訪日研修グループ

8・9両月、ハウスは左記四つの訪日グループを迎えた。まず、国際教育交換協議会(CIEE)主催「米国大学日本研究夏期セミナー」の「事後研修」で、スタンフォード大、ペンシルベニア大など一〇校からの三二名が四泊、この夏の滞日研修を締めくくった(左掲写真)。

他に東京工業高等専門学校の招へいによる韓国専科大研修生二二名、国際交流基金「海外日本語講師研修会」で東南アジア、中南米諸国七カ国からの一六名、産業能率大「マレーシア人企業家養成プログラム」の二三名などで、いつものように他グループの在泊者との間に交歓風景がみられた。



滞日研修の打上げパーティーで歓談する米10大学の学生たち(交友館)

わたしたちの合宿

毎夏定例の「再会」合宿

——通算二〇回目のクライツィグ・ゼミ——
東京理科大学教授 大沢 綱一郎

私たちのゼミが大学セミナー・ハウスを訪ねたのは昭和48年の夏だった。当時の九名はいずれも物理学科2年生で、物理学に必要な数学の大綱に通じたいという希望に燃えて、一年生の秋からかなり部厚な数学の原著(E. Kreyzig: Advanced Engineering Mathematics, 3rd ed.)に挑戦していた。昭和51年3月に卒業するまで、この九名は一人も落伍することなく最後まで頑張りつづけ、卒業を前にした冬のゼミで、クライツィグの原著約八五〇ページを読了した。そのよるこびは非常に大きいものであった。この間、輪講は必ず大学セミナー・ハウスを利用して行われ、主として大学の休みの期間を利用して、時には六泊七日のこともあり、計一〇回を必要とした。

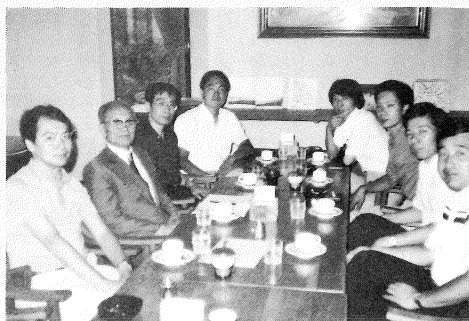
この大学セミナー・ハウスは、静かな思索に適し、数学書の輪講には最適で大いに能率が上がった。輪講は九名の当番制で一人一回約三〇分で一日に二回以上だった。日中は輪講、夜分は明日のための予習のあけくれで、進行はおおむね順調だった。この食堂がまたよい雰囲気だ、コーヒーなどをサービスしていたので、楽しい談話に時のたつのを忘れることもしばしばだった。卒業してからも毎年夏一回定期的に必ずこの丘に集まり、

往時をしのび、感謝と感激とを新たにしている。卒業してから今年で一〇年目、同じ一〇人が集まる再会のゼミを今年の夏も開いた。はじめてここに来てから、二〇回目の、同一メンバーのゼミである。仲間の一人一人に感想を書いてもらったものを、同志の一人篠崎啓助君にまとめてもらった。

◇

まず、ゼミの仲間九人の現在の職業を紹介しよう。伊藤意智郎・電子機器の設計およびプログラムの開発、佐野幹夫・機械加工に関する仕事、篠崎啓助・光通信及び光情報処理用半導体レーザーの開発、柴田誠・インクジェットプリンタヘッドの開発、瀬田祐司・中学校理科教諭、仙田啓・新薬の安全性試験、太幡祐己・光学測定器の電気設計、中山光雄・原子力関係の大型コンピュータプログラムの開発、橋本智・中学校理科教諭と以上のように見えますが、久しぶりに会って話をすれば、多くを語らなくとも共通して理解し合えるものが多々あります。

私達は在学中にあってはハウスで部厚い数学の書物を、大沢先生に導かれ読み終えました。これは学生時代に私達に自信を与えた良き思い出の一つであると共、現在の職業に直接、間接に役立っていることなのです。また卒業後の現在にあっては、年一回のハウスでの会合が、メンバーの一人一人にとってどう位置づけられているか書いてもらったものをま



各方面で活躍する愛弟子たちとともに——左から2人目が大沢教授(交友館)

とめてみましたところ、ほぼ次のようでした。

- (1) 仲間の近況報告に接するごとに自己啓発される。
- (2) 狭くながちな視野が広がる。
- (3) 今後の日常生活に対する新たなテーマが見出される。
- (4) 刺激を受けて新たな活力がわいてくる。

といったところです。

このように、在学中・卒業後を通じてメンバー全員が意義ある一時を過ごせるのは、良き師に恵まれたためであることはもちろんですが、理想的環境を与えて下さった大学セミナー・ハウスに負うところが大変大きいのです。ここに、感謝と共に、ハウスの今後のますますの発展をお祈りいたします。

予 告

●第12回国際学生セミナー●

主題 発展と平和のモデルを求めて——海外体験をどう活かすか——

期日 1985年11月29日～12月1日(金～日)

募集人員 約70名(日本人:学生40名・社会人10名, 外国人:留学生15名・社会人5名)

申込締切 1985年11月19日(火)

◆セクション演習

- A. 海外留学は何になる
放送教育開発センター研究開発部教授 阿部美哉
共同通信文化部次長 中村輝子
- B. 海外援助と文化効率
早稲田大学理工学部教授 菊地 靖
- C. 海外勤務——職場と地域社会
成蹊大学経済学部教授 広野良吉
朝日新聞編集委員 松井やより
- D. 日本における海外研修生の職場と生活
労働省海外協力課長 木全ミツ

●第134回大学共同セミナー●

主題 エントロピーなしで生きられるか

期日 1985年12月13日～15日(金～日)

募集人員 約70名

申込締切 1985年12月3日(火)

◆全体講義 エントロピーの概念

一橋大学経済学部助教授 室田 武

◆講話・炭焼き指導 生きるための炭焼き

元農林水産省木材炭化研究室長 杉浦銀治

◆セクション演習

A. エントロピー論争

理化学研究所研究員 樋田 敦

学習院大学理学部教授 江沢 洋

B. 生産・消費のエントロピー

千葉大学法経学部教授 中村達也

C. 生物圏におけるエントロピー・経済

元農林水産省木材炭化室室長 杉浦銀治

一橋大学経済学部助教授 室田 武

◆シンポジウム

I. 水と土と太陽と

理化学研究所研究員 樋田 敦

元農林水産省木材炭化室室長 杉浦銀治

II. 暮らしと汚しとエントロピー

埼玉大学教育学部教授 暉峻淑子

千葉大学法経学部教授 中村達也

III. 考えることの熱力学

東京大学経済学部教授 竹内 啓

一橋大学経済学部助教授 室田 武

◆問い合わせ先=企画室 ☎ 0426-76-8532 <直通>

16

- | | |
|------------------------|-------------|
| 東京都立大学教授 | 長倉 康彦 |
| 東京電機大学建築学科 | 増田 茂樹 |
| 明治学院大学教授 | 中村 秀吉 |
| 千葉大学教授 | 木村 久男 |
| 明星大学教授 | 讃岐 和家 |
| 国際基督教大学教授 | 北野 弘久 |
| 早稲田大学講師 | |
| 杏林大学医学教育ワークショップ | |
| 立教大学五十嵐・深沢組 | |
| 芝浦工業大学助教授 | 大塚 正久 |
| 東京都立大学助教授 | 小寺 彰 |
| 芝浦工業大学助教授 | 十代田知三 |
| 成城大学教授 | 鈴木日出男 |
| 東京女子大学教授 | 山本 幸一 |
| 一橋大学助教授 | 塚田 富治 |
| 東京都立大学留学生オリエンテーション | |
| 東京大学教授 | 菊地 昌典 |
| 上智大学教授 | 三好 崇一 |
| 上智大学教授 | グスタボ・アンドラーデ |
| 立教大学教授 | 栗原 久 |
| 東京大学教養学部勉強会 | |
| 東京理科大学教授 | 伊藤 玄三 |
| 慶応義塾大学渡部・植松研究室 | 水野 哲一 |
| 上智大学教授 | 堀坂浩太郎 |
| 明星大学助教授 | 小田中敏男 |
| 都立工科短大教授 | 西岡 幸泰 |
| 専修大学教授 | |
| 山梨英和短期大学英文学科 | |
| 都留文科大学教授 | 和田 明子 |
| 東京Y.M.C.A.英語専門学校ボランティア | |
| グー研究会 | |
| 茨城大学卓球部 | |
| モラロジー研究所 | |
| 建築設備耐久性研究会* | |
| 聖書キリスト教会 | |
| カンバーランド長老キリスト教会 | |
| 本所緑星教会聖友会 | |
| 東京授業研究会 | |
| 野方町教会教会学校 | |
| ルソール合衆会 | |
| 高橋聖書集会 | |
| 国際交流基金海外日本語講師長期研修会 | |
| 日本分光工業* | |

○編集後記○

開館に先立つ昭和40年1月25日に、本紙は創刊された。標題に「予報」(セミナー・ハウス)が選ばれたのも、当時の見識であったろう。ハウスの事業計画を推進された企画委員会の初代委員長、故手塚富雄先生のご提言に、よった、と飯田宗一郎名誉館長から伝え聞いている。創刊号からは開館を目標として躍動している思ふかが伝わってくる。

さて、開館20周年と創刊100号が奇しくも重なったこの機会に、表紙のデザインを一新し、組版も活版からオフセットへ切り換えた。この記念号をお届けするに当り、編集の構想も新たに、読者の皆さまとのつながりを一層深めていきたいと願っている。(能)

表紙の写真は出雲の丘と本館をむすぶブリッジ(提供:彰国社)

- | | |
|---------------|-------|
| 宇都興産住宅 | 堀 光男 |
| 日本生産性本部 | 大前 隆子 |
| 岩崎通信機 | 富田 嘉雄 |
| オリンパス光学* | 富田 哲也 |
| アイワールド* | 金井ハツエ |
| 東芝プロセスソフトウェア | |
| ユナイテッドステイブル | |
| 酒井薬品 | |
| ウチダコンピュータシステム | |
| 沖電気工業 | |
| 東芝府中工場 | |
| 富士フアコム制御 | |
| 宇都興産 | |
| 興亜火災海上保険 | |
| 日本電気 | |
| 久光製薬 | |
| (個人利用) | |
| 東洋大学教授 | |
| 関西地区大学セミナーハウス | |
| 神奈川信用保証 | |
| 共和工業所 | |
| 日本リフト | |
| 法政大学教授 | |